NEWS 病院ニュース

2013年1月
第32号
（年4回発行）

主な内容

1 ・アレルギーセンターを開設
・病院長　新年挨拶

2 ・ボランティア活動員に感謝状を贈呈
・新外来棟工事のおしらせ
・患者さんの声

3 ・元看護師長・飯沼君子さんが「瑞宝単光章」を受章
・医療安全推進週間　・「あいぞめ販売会」を開催しました
・［ミニニュース］2012 クリスマスイルミネーション

4 ・［フリートーク］輸血・細胞療法部 部長／診療教授　井関 徹
・［トピックス］花粉症
・［ちばをてくてく］⑧千葉市美術館

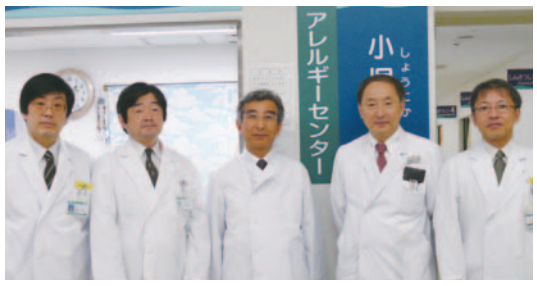
千葉大学医学部附属病院　〒260-8677 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1
TEL 043-222-7171（代表）
http://www.ho.chiba-u.ac.jp/

ホームページで「病院ニュース」のバックナンバーがご覧いただけます。

世界に誇る専門知識を結集し、質の高い診療を！

アレルギーセンターを開設

治療学の推進リーダー養成プログラムもスタートしました



アレルギーで苦しむ患者さんの診療で4つの科が連携

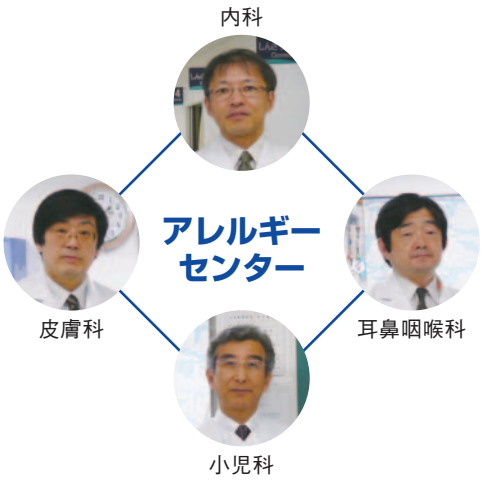
内科、耳鼻咽喉科、皮膚科、そして小児科による「アレルギーセンター」が平成24年10月1日に設置されました。

千葉大学医学部はこれまで、「免疫アレルギー分野」において卓越した成果を上げ、世界的な研究者、臨床医を多く輩出しています。アレルギーセンターの開設は、他病院にない千葉大学病院のアレルギー診療の実績を踏まえた優れた特徴の一つです。

アレルギーセンターでは、子どもからお年寄りまでのすべてのアレルギー疾患に、内科、耳鼻咽喉科、皮膚科、そして小児科のアレルギー専門医が連携して診療に当たります。診療は診療科のそれぞれの外来で行いますが、4科が症例の検討会を共同で開催することで情報を共有化し、また免疫学手法に基づいた新規治療法や発症予防法の確立などを含めた総合的で質の高いアレルギー診療を目指していきます。

また、アレルギーセンターは、医学研究院がスタートさせたリーディング大学院「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」と呼応しており、アレルギーの新たな治療開発を担う人材の育成を臨床の現場から支えています。

（アレルギーセンター長　河野陽一）



＜対象となる疾患例＞
- 気管支ぜんそく
- アレルギー性鼻炎
- アトピー性皮膚炎
- リウマチ
- 膠原病
- 食物アレルギー
- 花粉症

など

グローバルに活躍する人材を「リーディング大学院」で養成 新たな治療法の開発を目指す

リーディング大学院「博士課程教育リーディングプログラム」は、優秀な学生をグローバルに活躍するリーダーへと導くため、文部科学省が推進している事業です。千葉大学では平成24年度オンリーワン型に「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」が採択されました。

千葉大学の100年以上にわたる医学・薬学分野の実績を活かして、難治性の免疫関連疾患に特化した治療学の推進リーダーを育成していきます。

アレルギーセンターは、未来医療教育研究センターとともに、プログラムの中核的存在となり、各診療科の医師、薬剤師、看護師、栄養士などがそれぞれの職種を超え、アレルギー疾患に関する臨床研究と集学的診療をここで学びます。

将来的には、アレルギー疾患を総合的に診療できる総合アレルギー医や、アレルギー疾患診療に習熟した薬剤師、看護師、栄養士を育成し、地域のアレルギー診療の質の向上につなげていきます。

さらに、医学研究院の基礎系の免疫・アレルギー研究関連領域と共同でアレルギー疾患の横断的研究も推進し、新規治療法の開発を目指します。

今後、医療関係者を対象にした講演会を開催するほか、患者さんを対象にした「市民公開講座」などにも積極的に取り組んでまいります。どなたでもご参加いただけますので、ぜひ、お気軽に足をお運びください。

（アレルギー・膠原病内科　教授　中山俊憲
免疫発生学　教授　中島裕史）

新年挨拶

千葉大学医学部附属病院長
宮崎　勝

新年明けましておめでとうございます。

新しい平成25年（2013年）が千葉大学医学部附属病院にとって新たな飛躍の年になるものと願っています。

昨年は新外来棟工事が起工され、いよいよ今年、本格的工事に入っていくことと思います。同時に外来駐車場も工事が始まり、亥鼻キャンパスが少々騒がしく、来院される患者さんにも何かとご迷惑、ご不便をおかけしますが、新外来棟完成の平成26年には皆様方にとって更に快適で高機能の千葉大学附属病院に衣替えしてご来院いただけるようになります。職員にとっても工事期間には大変何かと業務上の不自由がありますが、ご協力いただきたいと思います。

我々の病院は高度急性期病院ですので、年末を病院で迎えられた患者さんも多いことと存じます。また、年末年始も多くの職員が大学病院ならではの重症例の診療管理に携わった職員も多いと思います。いつも本当にご苦労様です。大学病院のような高度医療の超急性期疾患中心の診療を行っている病院に取っては、普段から土日休日もまた年末年始もありません。多くの職員が命がけで患者さんの治療にあたっていることを職員は自負いただき、またそこで治療を受けられる患者さん方もこのことを知っていただきたいと思います。

我々、千葉大学附属病院の職員は、そのような重症の患者さんに責任を持って、高度かつ先進的医療を行っているというプライドを持っていただきたいと思います。勿論このようなプライドを持つということは、裏を返せばその責任もしっかり合わせ持つと言うことになるわけです。その責任は大変大きなものではありますがその責任をしっかり果たしていくことが、我々の行っている仕事に対してのプライドも持て、また自信にも繋がってくると思っています。

今年1年もこのような高いプライドと責任を持って千葉大学附属病院は更に大きな前進をして発展していきたいと思っています。職員の皆さんの更なる活躍と共にここに来られる患者さんと共に、良い医療を一歩一歩さらに進めて質を高めていきたいと願っています。

多くの皆様方の更なるご協力をお願い申しあげると共に皆様にとってこの平成25年という年が良い年でありますことを祈念して新年のご挨拶とさせていただきます。

新外来診療棟、建設中！

新外来棟工事のおしらせ

病院では、より高度な医療を行い、さらに患者数が増加する外来で患者さん中心の安全な医療を提供するため、現在、新外来診療棟の工事を行っています。

平成26年5月末完成を目指して工事を進めてまいります。ご来院の皆さまにはご迷惑をお掛けいたしますが、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

新外来診療棟の完成予想図

公共交通機関のご利用のお願い

新外来棟の工事に伴い、駐車スペースが減少し、ご来院の皆さまには大変ご迷惑をおかけしております。
病院にお越しの際は、なるべく電車、バス、タクシーなどの公共交通機関をご利用くださいますようお願い申し上げます。

ボランティア活動員に感謝状を贈呈

80名以上がボランティア活動員として活躍しています

千葉大学病院では、たくさんのボランティア活動員が活躍しています。そこで、病院から感謝の意を伝えるため、毎年「感謝状贈呈式」を行っています。今年は8名の方が対象となり、10月19日に宮崎病院長から感謝状と記念品をお渡ししました。

贈呈式では、参加者によるボランティア活動の紹介や、リハビリテーション部・村田部長による講演、展望ラウンジでの懇親会を行い、活動員同士や活動員と病院職員との活発な意見交換や交流の機会を持ちました。

現在、活動員は80名を超え、活動内容は「外来受診のサポート」「車いす利用者の搬送」「図書室の運営」「対面朗読」「ギャラリーへの作品展示」「待合ホールでの楽器演奏」「小児病棟や院内保育所での読み聞かせや遊びのお手伝い」「病棟内ラウンジの環境整備」など、まさに多彩。それぞれ持ち前の技能を生かし、快適な病院づくりを支えてくれています。

病院職員が気づきにくい点にも目を向け、日々活動してくださる活動員の皆さんに心から感謝しております。私たちも手を携えて、さらなる患者サービスの向上に努めてまいります。

（地域医療連携部長　藤田伸輔）

宮崎病院長のあいさつ

ボランティア 活動員募集中！

活動内容など、まずはお問い合わせください。

○お問合せ先
千葉大学医学部附属病院 地域医療連携部
○電話　043-222-7171　内線 6487～6491
○受付時間　月～金　9:30～16:00

患者さんの声

皆さまからこんな声が届きました。
患者さんの声にお答えします。

ご要望

Q　看護師さんも一生懸命なのはわかりますが、土日、祝日は平日に比べると、手薄に感じます。平日とは動きも違うのではと感じます。ベテランの看護師さんはいるのでしょうか。とても不安です。

A　このたびは貴重なご意見をありがとうございました。ご指摘いただきました看護師の勤務体制についてですが、検査、処置、手術、入院件数等を考慮し人数の割り振りをしております。したがって、予定された検査や手術がない休日は、平日に比べて少ない人数になることは事実です。しかし、休日においても経験豊富な看護師が必ずリーダーとして勤務していますので、安心して療養していただければと思います。

お便り

6階にお世話になって半月、一時は生死をさまよっていたようですが、お陰様で元気に退院することができました。先生方にはわかりやすく丁寧に説明していただいたので、なぜこの検査をする必要があるのか、それによってどんな事がわかるかなど、私でも理解することができました。今回の結果や今後の注意点を、しっかり理解して退院することができます。

看護師さんが、面倒なお願いをしても笑顔で対応して下さったことがとても印象に残っています。とても明るく元気をもらいました。

長期入院は初めてで、私自身だけでなく家族もいろいろな事を考えるきっかけになりました。この経験を前向きにとらえて、助けてもらった命を大切に生きていこうと思います。本当にお世話になり、ありがとうございました。

元看護師長・飯沼君子さんが「瑞宝単光章（ずいほうたんこうしょう）」を受章

平成24年秋の叙勲で、当院で22年3月まで看護師長として勤務していた飯沼君子さんが瑞宝単光章を受章しました。飯沼さんは、現在、千葉市内の看護専門学校の専任教師として活躍しており、教育者として後進の育成にあたっています。

【飯沼君子さんより寄稿】

平成24年秋、瑞宝単光章の名誉に預かり誠にありがとうございました。

看護の道を歩み、約半世紀が過ぎました。レンガ作りの現医学部である千葉大学病院が私の看護の原点でした。振り返ってみますと、医療の高度化に伴い、看護範囲も多岐に渡り複雑化し、さらに看護師の質の向上も問われるようになりました。そのなかで私は何よりもチーム医療の必要性を感じ、社会の要請に応じた医療サービスの提供が責務だと考えています。そこでの看護師の役割は、患者さんのかたわらにいて、治療に専念できる治療環境を整えることです。

千葉大学病院の看護職者が、患者さん中心の看護に専念するために、チームとして切磋琢磨しながら能力向上をはかってきたことを、私は誇りに思っています。

今後、多くの皆さまからご指導いただいたことに感謝し、今後も皆さまが健康に生活できるように支援していきたいと思っています。ありがとうございました。

千葉大学病院勤務時代の飯沼さん（右）

医療安全推進週間

～わかるまで 聞こう 話そう 伝えよう～

ポスターとティッシュで「医療従事者と患者の相互理解」を呼びかけました

千葉大学病院では、11月25日（いい医療に向かってGO）から1週間を「医療安全推進週間」として、患者さんの積極的な医療参加を呼びかけました。

今年はポスターの掲示のほかに、標語の書かれたポケットティッシュを配布し、より多くの患者さんに呼びかけることが出来ました。

ポケットティッシュを手に取った患者さんからは、「先生に相談しようか迷っていたけど、やっぱり聞いてみます」という明るい声もありました。

（医事課医療支援室　医療安全係長　加瀬正和）

「あいぞめ販売会」を開催しました

12月12日に千葉大学教育学部附属特別支援学校の中学部生徒による「あいぞめ販売会」が行われました。これは同校の作業学習の一環として行われたもので、千葉大学病院では昨年に引き続き2回目の開催です。

当日は好天にも恵まれ、病院正面玄関西側の屋外に設けられた会場には、生徒たちが力を合わせて作り上げた藍染め製品が所狭しと並べられました。

患者さんやご家族の方々、病院職員など多くの人でにぎわいを見せていました。

Tシャツやエコバッグ、タオルなど16種類のグッズを販売

mini news

2012 クリスマスイルミネーション

千葉大学病院は毎年12月になるとクリスマス一色になります。12月3日、外来ホールにクリスマスツリーが飾られ、夕方には病院長、看護部長が出席し、ライトアップセレモニーが行われました。2012年は通路脇のイルミネーション等、バージョンアップしています。

イルミネーションは、みなみ棟とひがし棟の間の中庭でも見ることができます。また、ディズニーのセル画の廊下脇の中庭には、やさしい光を放つランプシェードも飾ってあります。

病院正面玄関下のヒュギエイアの庭

千葉大の学生と患者さんが作ったランプシェード

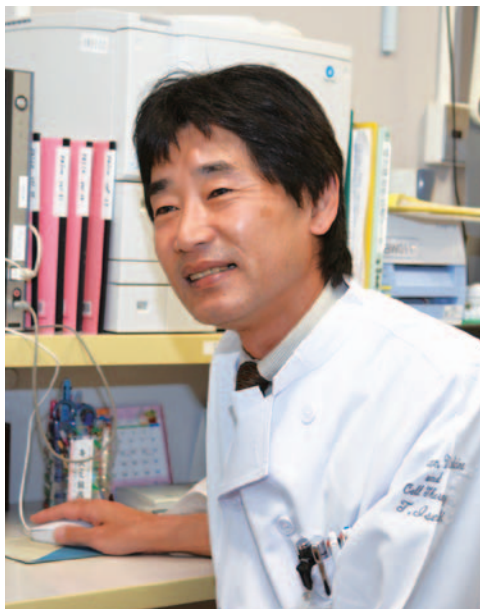
外来ホールのクリスマスツリー

中庭のイルミネーション

FREE TALK フリートーク

千葉大学医学部附属病院
輸血・細胞療法部 部長／診療教授
井関　徹（いせき とおる）

医療の高度化で、輸血量が増える中 細胞療法も進めながら、安全な輸血を目指しています



院内すべての輸血の管理と、輸血療法を行うのが私たちの仕事です。「輸血」は、善意のドナーの献血によって成り立っている点と、他人の血液を体に入れるという点で、薬剤を使うのとは異なる特殊な治療です。輸血というと赤い血液をイメージされる方が多いと思いますが、血液から採る血小板や新鮮凍結血漿などの成分も、輸血製剤です。

近年は、細胞を使った先端医療も私たちの業務の大きな柱になっていることから、これまでの「輸血部」が、新しく「輸血・細胞療法部」という部署名に変更しています。

輸血は増えているのに献血が減っている…？

医療の高度化を反映して、当院では骨髄移植などの造血幹細胞移植、生体肝移植、また、リスクの高い心臓の手術や出血量の多い外傷などの救急が多くなり、輸血量が増えています。輸血量の増加は、当院だけでなく全国的な傾向なのですが、若い人の献血が減っていて、需要と供給のバランスがとれず、危うい状態です。昔は10～20代の献血が多かったのですが、今は40～50代の献血で持ちこたえているのが現状です。

無駄な輸血をしない「適正な輸血」の推進はもちろんですが、輸血製剤には赤血球が21日、血小板が3日と使用期限があるため、期限切れ製剤の廃棄を避けるための在庫調整には常に気を配っていますが、献血量を増やしたいというのは、現場の切実な願いです。

進む細胞医療

大学卒業後、平成10年から7年ほど東大医科学研究所附属病院に勤務したのですが、そこで当時日本では初めてだった成人の白血病の患者さんへの臍帯血移植が成功し、現在では標準的な治療になってきたことで、血液分野の研究がさらに面白くなりましたね。難治性の病気などに苦労も多いのですが、移植では世界のトップクラスの先生がそろっていて、ここでの経験が、とても刺激になっています。

従来の輸血の業務に加え、血液から採取した細胞を使う細胞治療などの先端医療は今後も増えてくると思います。iPS細胞が話題になりましたが、当院では最先端の治療は、未来開拓センターで行います。医療が進歩するにつれ、これらの治療が日常臨床で行われ、その際には細胞の採取、加工、保存など、当部で行う部分が増えてくると思います。

救急センターの建設予定もありますし、医療の標準化を進めながら先端医療に対応できる輸血チームを作っていきたいと思います。

Profile

井関　徹（いせき とおる）

広島県出身。昭和56年、千葉大学医学部卒業後、千葉大学医学部第一内科に入局。平成10年～17年、東京大学医科学研究所附属病院勤務。平成17年より千葉大学医学部附属病院輸血部。
子供二人は社会人になって家を出て、現在は奥さまとの二人暮らし。趣味はサッカーだが、最近はプレーするよりももっぱら観戦。それも千葉大医学部サッカー部の試合など、マニアックな試合が多い。

ちばをてくてく　8　千葉市美術館

「Kimono Beauty」ボストン美術館から里帰りしたきもの

着る人ばかりでなく、見る人を晴れやかな気持ちにしてくれる「きもの」。新春にふさわしく、千葉市美術館で、「Kimono Beauty」の展覧会が開催中です（2月11日まで）。

展示されているのは、モダンな香りを残す江戸時代中期から昭和初期に作られたもの。

「きもの」は日本独自の伝統の衣装ですが、美術品のような美しさから、最近ではアートとして眺めようという動きもあります。約350点の「きもの」が展示され、うち17点は、ボストン美術館の所蔵品で、明治期に来日し、日本文化を愛したアメリカ人医師ウィリアム・ビゲローの収集品。アメリカ人の目を通した貴重な、きものコレクションとなっています。日本女性を美しく飾ったきもの文化を、見て楽しみましょう。

※会期中きものを着て来館すると、観覧料が2割引になり粗品のプレゼントがある「きもの割引」もあります。
※2月4日（月）は休館日となります。

《紅綸子地几帳模様打掛》
江戸時代・18-19世紀
ボストン美術館蔵
Photograph © 2013 Museum of Fine Arts, Boston

**「Kimono Beauty
－シックでモダンな装いの美 江戸から昭和－」**
◎千葉市美術館
千葉市中央区中央3-10-8
TEL:043-221-2311（受付時間9:30～18:00）
http://www.ccma-net.jp/

トピックス　花粉症

気になる人は、早めの対策を

間もなくスギ花粉症のシーズンがやってきます。昨年のスギ花粉飛散は少なかったのですが、今年は平年より多く飛散すると予想されています。もちろんスギ花粉症は死に至るような疾患ではありませんが、日常生活における支障は非常に大きなものがあり、睡眠障害を引き起こし学業や精神発達面への影響も指摘されています。

自然改善は、中高年者を除くと少数です。花粉症の対策は、花粉を出来るだけ浴びないこと、家の中に花粉を持ちこまない等の自己管理が基本ですが、最近の千葉大学での研究で、一旦花粉を浴びてしまうとたとえ花粉が周りになくても強い症状が翌日まで続くことが明らかになっています。

花粉症では、適切な治療を受けることが必要です。ポイントは症状の軽い早期から治療を開始すること。ただ、薬でかえって眠気などの副作用が生じてしまうことがあります。薬にもいろいろな特徴がありますので、例年症状が強い方はきちんと医師と相談することが大切ですね。

（耳鼻咽喉・頭頸部外科
教授　岡本美孝）

あとがき

病院ニュースは今号で32号となりますが、私が初めて病院に異動してきた平成8年4月頃は、現在のようにインターネットのホームページなどもなく、患者さんにお知らせする手段は掲示物が中心でした。

その後、患者さん向けに院内の情報をお知らせするリーフレットを作ってはどうかとの意見が出され、平成16年5月に第1号が発行されたと記憶しています。

今後も、さまざまな情報を分かりやすくお伝えできればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（編集委員　医事課医療支援室　田辺朗）